
零崎稻織の人間攪乱

零崎稻織

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

零崎稻織の人間攪乱

【Nコード】

N7801C

【作者名】

零崎稻織

【あらすじ】

人識によって零崎に加わった稲織といーちゃんのお話。

(前書き)

零崎を、はじめよう。

悪夢を見た。

息苦しい。かきわけてもかきわけてもみつからぬ出口。
そこに未来などない。

私はあの人に声をかけてほしかったのかもしれない。
何を期待しているのだろう。

優しい言葉をもらったとしても、苦しみは変わらないのに。
悲しくなるだけじゃないか。

惨めになるだけじゃないか。

少しは楽になれるとでも思ったか？馬鹿馬鹿しい。

今がすべてなんだ。

事実が変わらない。

そして過去も。

「よお」

なんだ人識くんか。

「今がっかりしたろ？」

私は慌てて首を横に振る。

「それくらいわかかんよ」

零崎人識、氷点下の刃物が言った。

その言葉は冷たいようで、突き刺さるように温かった。

「あいつが好きなんだろ？」

「わからない」

あの人は確かに私を好きではない。だけど私は……。

「まだ気にしてんのか？」

「……………」

「あいつなら大丈夫だ。俺が保証する」

この人はどうして私を、私なんかを選んだのだろう。殺人鬼になれない殺人鬼を。

選ぶも何も、お前が零崎だったから。俺たちの家族だったから。そんな風に返ってきそうだ。

「まあ、泣きたかったらいつでも泣きな。この胸貸してやんよ」
なんだこの人。少しだけ笑えてきた。人識くんも笑った。

零崎稻織。表の名は……もう一生名乗るつもりもないし、あえて言わない。

あの人もそうだ。本名を教えない主義。
変わっているけどすごくいい名前らしい。知りたい。と思う。知ったところで別段何も起こらないけど。好きだからなのか、知りたいのはいの。

あの人は教えてくれないだろう。

かつてあの人の名を知った者は3人。いや、かの策師、萩原子菝を合わせると4人か。玖渚のお嬢様に橙なる種、そしてあの人の妹。あの人にとって玖渚友はどういう存在なのだろう。ただの友達。そう言っていたけど。到底そうは思えない。

「戯言なんだよ」

あの人はそう言うだろうか。

嘘つきで、鈍くて、メイド好きで……全然好みじゃないのに、あの人を守ってあげたいと思った。あの人のことをもつと知りたいと思っただ。

今も。

寂しげな背中を見たから？

私はあの人を傷つけた。

「君、名前は？」

「零さ……伊織です。無桐伊織」

「へえー。いい名前だね」

私は嘘をついた。無桐伊織は、零崎舞織の表の名だ。

「あなたは？」

「ん、ぼく？名乗るほどの者でもないよ。いーちゃん。いつくん。

いの字。いーの。いーいー。好きに呼んでくれて構わない」

あの人は冷めた顔で言った。

「そう、ですか」

「お、いーたん。そいつは俺の家族だけ。もしかして気に入ったのか？」

なぜかそこに人識くんが現れた。全く予想外な展開だ。近くに家族とおぼしき人物がいるのだろうか。

「いや」

「U-150の貧乳娘だがよろしくな。これからはお義兄様と呼んでくれ」

「だから話を」

「確かに身長は低いです。胸が小さいのも事実です。だけどそんな……」

私はものすごく気にしていたから。

「伊織ちゃん……」

「同情なんていりません！私は女のなり損ないで、男でもないんです！もう私のことは放っておいて下さい！」

あの人が心配そうな顔をしたからか、訳のわからないことを口走っていた。放っておいて下さいなんて、あの人がそこまで私に構うわけがないのに。

そして気づいたら、あの人に平手打ちをかましていた。言い訳にならないだろうが、勝手に手が動いたのだ。あの人は当然驚いたが、親にも叩かれたことないのに。みたいな反応はなかった。叩かれ慣れている。というとおかしいけれど、そんな感じ。

「ごめんなさい」

「こういうのは慣れてるんだ。星の数ほどの女の子と付き合っ

たからね」

「ごめんなさい」

「もういいよ。伊織ちゃんは嫌だったんだろう？」

私はうなずいた。優しさに涙がこぼれた。

「そもそも零崎の奴が悪いんだけどね」

「俺が悪かったよ。だからって、いーたんを殴るのはよくないぜ」

「私がつまらないことで怒ったのが悪かったです。助けてもらったのに……本当にごめんなさい」

いつそ、怒るか殴り返すかしてくれたら私も救われただろう。あの人は何も言わず、ただ冷めたようなそれでも優しい瞳で私を見つめた。

「電車に乗れない私を助けてくれた。なのに私はあんなことをしてしまつて……」

私は俯いた。

「まさか電車に乗れない零崎がいたとはな」

人識くんは少し笑った。

「それに嘘をつきました」

「無桐伊織を名乗ったことか？ たぶんあいつは気づいてやがるよ」

「気づいていたからといって許されるわけではありません。電車に乗れないのは恥ずかしかったから、舞織さんにも申し訳なくて」

「無桐伊織は存在しない。紙切れの上でだけだ。お前は悩みすぎなんだよ。そんなキャラでよく殺人鬼になれたもんだぜ。かかかつ」

「悩みすぎ、なんででしょうか？」

「殺人鬼は殺人鬼らしくなっ」

何をやっているんだろう。うじうじ悩んでいる暇があれば、今すぐに行かなければならないのではないか。

あの人の住んでいるところは人識くんから聞いた。私はちょうどアパートから出てきたあの人をつかまえた。

「あ、あのー」

「ん？誰だったかな？見たことはあるんだけど……確か零崎の……」

「はい、稲織です。零崎稲織」

「最近忘れっぽくてね。そんな名前だったかな？」

「ごめんなさい。この前は嘘について、無桐伊織と名乗りました」

「そうだ。そんな名前だった」

「怒らないん……ですか？」

「偽名を使ったこと？ぼくに怒る義務はないと思うけど？」

「あなたらしいです」

あの人が眩しかった。

「で、何かな？」

「どうしても謝りたくて」

「謝ってもらわなくてもいいよ。もう済んだことだ」

「じゃあ、せめて何かさせて下さい」

「エロいこと？」

あの人は真顔で聞いてきた。一体、何を間違ってこんな人を好きになってしまったのだろう。

「ち、違います！」

「稲織ちゃん、顔が赤いよ？」

表情は変わらないけれど、あの人は少なからず私の反応を見て楽しんでた。

「付き合ってくれる？」

「え？今、なんて？」

私は慌てた。まさかそんなこと言われるとは思っていなかったから。

「買い物に」

なあんだ。ちょっと残念。

「はあ、買い物ですか？」

「友達の誕生日プレゼントを買いに」

「ご、ごめんなさい。お出かけの邪魔をしているのにも気づかず。」

私だったら、ほんと無神経で。ひどく時間をとらせてしまいました」

「だから、行こう！」

私の腕を引つ張ってあの人は言った。

あの人の中に少年を垣間見た瞬間だった。

「はいっ」

(後書き)

意味がわからなかったと思います。実際、電車に乗れない零崎とかいるのか!?

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7801c/>

零崎稲織の人間攪乱

2009年7月1日21時21分発行